SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

大学運動部に所属するアスリートの心理的特性に関する研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉山, 卓也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010307

大学運動部に所属するアスリートの心理的特性に関する研究

Research on psychological characteristic of athletes belonging to the university athletic club

杉　山　卓　也*
Takuya SUGIYAMA*

（平成 28 年 10 月 3 日受理）

Abstract

In this study, we performed questionary survey for the purpose of clarifying a psychological characteristic difference for 271 athletes who belonged to the university athletic club. As a result, statistical differences were found in some factors in sex, event, competition number of years, competition level, presence of parents, all the brothers constitution. Generally the long competition number of years, a high competition level, and parents group show high in a factor score, and it was expected. Also about the sex, it was expected that a competitiveness, a sense of responsibility are high in a man, and a woman shows high in sense of cooperation. The score of interpersonal sports relatively showed low in a factor score. About the brothers constitution, the score of the only child showed relatively high, but the detailed reason is not known. So further research will be necessary for the clear cause unfolding.

キーワード：大学運動部，大学体育会，心理的特性，心理的競技能力，競技種目

はじめに

スポーツの世界において，身体的能力が優れているものが必ずしもトップレベルで活躍するとは限らない．オリンピックで金メダルを取るような選手や日本代表に選ばれる選手でも身体的に必ずしも優れているとは言えない選手も多く見受けられる．前述の通りであるならば，心理的能力や心理的特性といったものが，競技レベル等に何らかの関連があると考えられる．近年では，身体的に適した競技種目に転向させたり，優れた身体的能力を持った若いアスリートを早いうちから育てようとするタレント発掘事業が各地で行われているが，心理的能力，心理的特性等に関する選考基準というのは面接以外には行われていない．しかしながら，その心理的特性はある競技種目に適当であるかどうかなどの適性については関連はないのであろうか．その関連性への関心は断続的に続いており，これまでにもスポーツマンの性格特性に関する研究は行われてきている．

スポーツの各種競技において精神的能力がゲーム中の物理的パフォーマンスに大きく影響することは広く知られている．岡本ら（2008）は個人種目競技とチーム種目競技の心理的競技能力及び，各競技種目の心理的競技能力の特徴を調べ，検討している．その研究によれば，チー

* 保健体育系列

ム種目競技が個人種目競技に比べ心理的競技能力が優れている可能性が示されている．また各競技種目で心理的競技能力の特徴は異なることが示された．

本間（2009）はチームスポーツとしてシンクロナイズドスイミングの選手を対象に，シンクロナイズドスイミング日本代表の心理的特性の解明及び競技レベルの違いにおける心理的特性を調べている．この研究において本間は，シンクロナイズドスイミング日本代表選手は協調性が顕著に高く，忍耐力と自己実現意欲が高い一方で，リラックス能力，決断力，自信の評価が低いとしている．これに対して本間はシンクロナイズドスイミングの競技特性を反映したものとし，国際トップレベルのハイパフォーマンスが求められる選手においては重圧や緊張の中でゲームやトレーニングを行っていることからリラックス能力が低いとしている．さらに競技レベルの違いにおける心理的特性においては，より高いレベルの選手は忍耐力と闘争心が高いとし，経験の浅い選手が高いレベルのゲームに臨むときには緊張と不安が高まり，自己評価が全体として低下することを示した．

安田（1984）は個人的スポーツと集団的スポーツの選手の性格特性の違いについて，個人的スポーツの選手は孤独に耐え，克己心に富むため意志が強く，責任感が旺盛である反面，主観的，衝動的，協調性不足といった傾向があるとし，集団的スポーツの選手は活発的で協調性，客観性が優れるがゆえに，お人好し，意志薄弱，消極的，無責任などの傾向にあることを指摘している．

松田（1987）らは運動適性を運動（スポーツ）で高い成果を収めるのに必要とされる諸条件を個人が潜在的に備えている状態とし，個人の運動適性の有無やその程度を判定することにより，運動場面でのパフォーマンスを予想することや各運動種目ごとの適性が明らかになることで，各個人の能力や特性に適した種目選択，あるいは学習段階での指導・助言のための手がかりを得ることが出来るとした．また，これまでの研究から優れた競技力に関与する要因としての特徴として，①達成動機②忍耐力③対ストレス抵抗力④支配性⑤リーダーシップ資質⑥コーチ能力⑦内罰的，苦痛を我慢する能力⑧自信，大胆さ⑨知能の９項目を挙げている．さらに，パフォーマンスと関係の深い心理要因として①不安のコントロール②精神力③集中力を示している．

このように個人スポーツ，チームスポーツの研究はされているが，シンガー（1981）が“このような考えを更に多方面に発展させて，相対スポーツという観点から，例えばテニスとレスリングについて考える場合に，矛盾が生じて困惑してしまうことがある”と述べているように，テニスや格闘系の対人スポーツを加えることにより，さらに細やかな競技特性を調べることができる．そこで本研究では，大学の運動部に所属している学生を対象に，質問紙を用いたアンケート調査を行い，集団スポーツ，個人スポーツに，対人スポーツを加えた競技種目など，いくつかの要素における心理的特性の差異を明らかにすることを目的とした．この研究によって得た結果は具体的に，部活動で生徒を指導するとき，生徒一人一人の性格・特性に沿った指導をしたり，身体的な特徴だけではなく心理的な特徴も踏まえて，適材適所な競技・種目・ポジションに配置する際の指針となるなど，あらゆるスポーツ場面に活かすことが期待される．

方法

１．調査対象者

東海地区に所在するＳ大学の体育会に所属する大学生271名（男性：183名，女性：88名）を

分析対象とした．対象者の平均年齢は19.69歳（±1.17）であった．競技種目はサッカー，野球，陸上，水泳，テニス，剣道など15競技であった．

２．質問紙

質問紙の作成に当たっては，体育専門の教員１名とスポーツを専門に行っている学生５名で，「チームスポーツ」，「個人スポーツ」，「対人スポーツ」で，それぞれに差が出そうな因子とレベルや経験年数によって差が出そうな因子の内容を話し合った結果，心理的競技能力診断検査（DIPCA）から，「集中力」「自己コントロール」「リラックス」「協調性」「忍耐力」「闘争心」「勝利意欲」「自信」の８因子，性格を捉える16PFから，「責任感」の１因子の合計９因子の項目から質問紙を作成した．尚，DIPCAは１因子につき４項目，16PFは１因子につき５項目であったことから，他の因子得点との比較をしやすくするため，16PFの「責任感」の項目から“ルールだからといって必ずしも守る必要はない”，“チームのため，恩師のために身をすり減らしたくない”，“試合において何事もだらしないことが嫌だ”，“スケジュールは無駄のないように綿密に立てる方だ”の４項目を取り出し，スポーツ場面に適した文章に書き換え項目数をそろえることとした．

３．調査手続

調査はＳ大学の体育会に所属している各部活動に依頼し実施された．調査者が各部活動の活動場所へ出向き，調査対象者を集合させ調査用紙を配布した．その後，教示文を読み上げ，始めの合図で自由速度法によって，調査が開始された．回答が終了した調査対象者から順に調査者へ直接提出してもらった．調査所要時間は約10分であった．

４．分析手続

まず，各因子においてそれぞれに含まれる４項目すべてを合計し，４～20点の因子得点を調査対象者ごとに算出した．本研究では，性別，競技種目，競技年数，競技レベル，父母の有無，兄弟構成ごとに分析を行った．心理的特性の差異を検討するために，Microsoft Excel 2013におけるｔ検定および，IBM SPSS Statistics ver.22.0における一元配置分散分析を行い，下位検定としてTukey法を用いた．性別，競技種目，競技年数，競技レベル，父母の有無，兄弟構成の各変数がそれぞれ独立しているかを確認するため，相関行列を算出したところ，最大でも絶対値が性別と競技種目間の0.278であり，相関は低く，変数間の関係はほとんど見られないことが確認された．調査における各項目の群分けにおいて，競技種目は競技における種類から全15競技を「チームスポーツ」「個人スポーツ」「対人スポーツ」の３群に分類した．競技年数は小学校での６年間，中高それぞれの３年間を踏まえて，３年区切りに群分けを行った．競技レベルでは，過去の試合の出場経験を「県大会出場なし」「県大会出場以上」「県大会ベスト４以上」「ブロック大会出場以上」「ブロック大会ベスト４以上」「全国大会出場以上」として群分けを行った．父母の有無では，両親が揃っているものを「両親群」，親が父・母のみのひとり親家庭を，不適切かもしれないが本研究においては便宜上「片親群」と呼ぶこととした．親が父･母のみを「片親群」として群分けを行った．兄弟構成では，兄弟の有無に関して「長子」「中間子」「末子」「一人っ子」として群分けを行った．

結果および考察

1．性別について

表1は性別における各因子の平均値を示している（以降，表の尺度名に網掛けがあるのは平均値に差があるもの）．t検定の結果，闘争心，協調性，責任感に有意差が認められた．闘争心の因子に関しては，女性より男性の方が有意に高い結果となった（p<.05）．長谷川（2012）によると“男性が闘争的なのは，狩猟に出かけたり，縄張りを守ったりの歴史がある”と述べており，それを支持する結果となったと言えよう．協調性の因子に関しては，男性よりも女性の方が有意に高い結果となった（p<.01）．男性と違って女性は特定のグループと関わるシーンが多いため，その中で自分の立場を確立するために周りに合わせることが一因として考えられる．責任感の因子に関しては，女性よりも男性の方が有意に高い結果となった（p<.05）．“一家を経済的に支えるのは男性の役割であると考える傾向が男女ともに高い”（内閣府男女共同参画局推進課，2010）ことが指摘されており，未だに男性は家庭をささえるのは男の役割だという考えが男性には根付いている．このことが男女の責任感の差に直結していると考える．

表1．性別における各因子の平均値

性別	忍耐力	闘争心	勝利意欲	自己コントロール	リラックス	集中力	自信	協調性	責任感	合計
男（n=183）	13.69	15.22	14.12	13.16	11.82	14.17	11.54	15.08	10.91	119.72
女（n= 88）	14.35	14.43	13.44	13.38	11.76	14.67	11.05	16.27	10.28	119.64

2．競技種目について

次頁の表2は競技種目における各因子の平均値を示している．競技種目について分散分析を行った結果，自己コントロールの因子に関して有意差が認められた（F=5.356, p<.01）．下位検定の結果，「チームスポーツ」と「対人スポーツ」間（p<.05）で有意差が認められた．次いで，リラックスの因子に関して分散分析を行った結果，有意差が認められた（F=6.244, p<.01）．下位検定の結果，「チームスポーツ」と「対人スポーツ」間（p<.01）で有意差が認められた．また，集中力の因子に関して有意差が認められた（F=4.907, p<.01）．下位検定の結果，競技種目が「チームスポーツ」と「対人スポーツ」間（p<.01）で有意差が認められた．続いて，自信の因子に関しても有意差が認められた（F=11.255, p<.01）．下位検定の結果，「チームスポーツ」と「対人スポーツ」間（p<.01），「個人スポーツ」と「対人スポーツ」間（p<.01）で有意差が認められた．さらに，協調性の因子に関しても有意差が認められた（F=4.843, p<.01）．下位検定の結果，「チームスポーツ」と「個人スポーツ」間（p<.01）で有意差が認められた．合計の

表2．競技種目における各因子の平均値

競技種目	忍耐力	闘争心	勝利意欲	自己コントロール	リラックス	集中力	自信	協調性	責任感	合計
チーム（n=114）	14.29	15.47	14.30	13.86	12.74	14.84	12.05	16.12	11.02	124.69
個人（n=67）	13.70	14.63	13.21	13.48	11.46	14.55	11.99	14.66	10.63	118.30
対人（n=90）	13.58	14.58	13.91	12.26	10.87	13.52	10.07	15.23	10.38	114.39

因子に関しても有意差が認められた（F=9.326, p<.01）．下位検定の結果，「チームスポーツ」と「個人スポーツ」間（p<.05），「チームスポーツ」と「対人スポーツ」間（p<.01）で有意差が認められた．しかし，忍耐力，闘争心，勝利意欲，責任感の因子においては，どの組み合わせにおいても有意差は認められなかった．

自己コントロールの因子において，「チームスポーツ」が「対人スポーツ」よりも有意に高い結果となったのは，「対人スポーツ」では短い時間の中で相手の動きにより自らの動きも大きく変えなければならないため，自分のペースを保てなくなることが一因となっていると考えられる．一方「チームスポーツ」は相手一人の動きよりも，長時間の試合の中で全体の動きを見ることができるため，自分のペースを保ったままプレーすることが出来ると考えられる．リラックスの因子においても「チームスポーツ」と「対人スポーツ」で差があり，「チームスポーツ」の方が有意であると言える．「チームスポーツ」はミスをしてもフォローしてくれるチームメイトがいるため，ミスに対してのプレッシャーや不安が小さいと考えられる．一方で，対人スポーツはミスをしたら全て自分ひとりに降りかかって来るため，プレッシャーや不安が大きいと考える．集中力の因子において，「チームスポーツ」と「対人スポーツ」に差異が生じたが，はっきりとした理由はわからなかった．自信の因子において「チームスポーツ」と「個人スポーツ」，「対人スポーツ」間で有意差が認められた．福井ら（2014）によると，「チームスポーツ」に比べて「個人スポーツ」，「対人スポーツ」の方が不安を感じながら競技に取り組んでいるという結果が明らかにされており，不安を感じているということは自信がないということに言い換えることができるため，これを支持する結果となったと言えよう．協調性の因子において「チームスポーツ」が「対人スポーツ」よりも有意に高い結果となった．これは団体種目と個人種目の差だと考えられる．合計の因子において「チームスポーツ」が他の競技種目よりも有意に高い結果となった．「チームスポーツ」と「個人スポーツ」，「対人スポーツ」を比べて明らかに異なる点は，試合中に味方が近くにいるか，そうでないかである．つまり，このことから「チームスポーツ」は他の種目と違い，味方が近くにいることによって心理面に大きな影響を受けるということが考えられる．

３．競技年数について

表３は競技年数における各因子の平均値を示している．競技年数について分散分析を行った結果，闘争心の因子に関して有意差が認められた（F=4.314，p<.01）．さらに下位検定の結果，競技年数が「４年未満」と「13年以上」間（p<.05），「４年以上７年未満」と「10年以上13年未満」間（p<.05），「４年以上７年未満」と「13年以上」間（p<.05）で有意差が認められた．また，勝利意欲の因子に関して分散分析を行った結果，有意差が認められた（F=2.830, p<.05）．下位検定の結果，「４年以上７年未満」と「10年以上13年未満」間（p<.05）で有意差が認められた．また，自信の因子に関して分散分析を行った結果，有意差が認められた（F=3.495，p<.01）．下位検定の結果，「４年未満」と「13年以上」間（p<.05），「４年以上７年未満」と「13年以上」間（p<.05）で有意差が認められた．また，責任感の因子に関して分散分析を行った結果，有意差が認められた（F=2.567，p<.05）．また，合計の因子に関して分散分析を行った結果，有意差が認められた（F=4.391，p<.01）．下位検定の結果，「４年未満」と「13年以上」間（p<.01），「４年以上７年未満」と「13年以上」間（p<.01）で有意差が認められた．また，有意差が認められたどの組み合わせにおいても，競技年数が長い方が有意に高い

表３．競技年数における各因子の平均値

競技年数	忍耐力	闘争心	勝利意欲	自己コントロール	リラックス	集中力	自信	協調性	責任感	合計
4年未満（n=39）	13.46	13.77	13.54	12.87	11.13	13.92	10.38	14.95	10.03	114.05
4年以上7年未満（n=61）	13.66	13.92	12.82	13.10	11.44	14.23	10.56	15.05	10.43	115.20
7年以上10年未満（n=59）	14.03	15.49	14.17	13.07	11.68	14.05	11.41	15.31	10.51	119.71
10年以上13年未満（n=62）	13.94	15.69	14.52	13.32	11.98	14.68	12.00	15.65	11.08	122.85
13年以上（n=49）	14.53	15.86	14.55	13.80	12.63	14.73	12.35	16.51	11.33	126.29

得点を示した．しかし，忍耐力，自己コントロール，リラックス，集中力，協調性の因子では，どの組み合わせにおいても有意差は認められなかった．

闘争心の因子において，有意差が認められたのは，競技年数を重ねれば重ねるほど，試合機会も増え，ある程度の実力が基礎として備わっていくので，「新たに力（技術）を試したい」，「もっと戦いたい」という気持ちに大きく影響していくのではないかと考えられる．勝利意欲の因子に関して有意差が認められたのは,競技をする目的の変化が理由として考えられる．初めは友達の誘いや興味があったからというきっかけで競技を始めるが,競技年数が長くなるほど専門性が高まるので「勝ちたい」という意欲に繋がっていることが考えられる．田中（1994）の研究でも,スポーツの経験年数が約８年の学生24名を対象にした調査において,練習の目的が「試合に勝つため」の割合が多かったことから,経験年数が長いと勝利意欲が高い傾向にあることがわかる．自信の因子に関して，有意差が認められたのは，競技年数が長くなればなるほど，競技における失敗や成功をより多く経験しており，成功体験や失敗時の経験から対処策を考えたり，不安要素を競技年数による経験がカバーしたりすることが自信に繋がっているのではないかと考えられる．合計の因子において，有意差が認められたのは，競技年数が７年未満まではそれぞれの因子に関して，得点が高くなりにくく，７年以上から各因子の能力が伸びやすくなり，13年以上で特性がある程度高い得点を示すほど，力が備わることが考えられる．忍耐力，自己コントロール，リラックス，集中力，協調性の因子に関して，有意差が認められなかったのは，各因子において，競技年数の長さによって大きく差が開くほど特性自体に伸びが生じず，全体的に少しずつ特性が備わっていくことが考えられる．また，これら５因子の能力を伸ばすような専門的な心理的トレーニングがまだまだ行われていない現状を示唆するものであると考えられる．

４．競技レベルに関して

表４は競技レベルにおける各因子の平均値を示している．競技レベルについて，「県大会出場なし」「県大会出場以上」「県大会ベスト４以上」「ブロック大会出場以上」「ブロック大会ベスト４以上」「全国大会出場以上」の６つのカテゴリーに分類した．団体スポーツを競技レベ

表４．競技レベルにおける各因子の平均値

競技レベル	忍耐力	闘争心	勝利意欲	自己コントロール	リラックス	集中力	自信	協調性	責任感	合計
県大会出場なし（n=104）	13.67	13.88	13.39	12.71	11.26	13.79	10.01	15.08	10.14	113.94
県大会出場以上（n=67）	13.24	14.85	13.78	12.97	11.64	14.07	11.42	15.24	11.03	118.24
県大会ベスト4以上（n=27）	14.89	16.63	15.26	14.04	12.30	14.70	12.63	16.30	11.52	128.26
ブロック大会出場以上（n=25）	13.84	15.84	13.72	13.64	12.48	15.52	13.04	15.84	11.16	125.08
ブロック大会ベスト4以上（n=17）	14.06	16.29	15.71	13.59	10.94	14.00	12.24	15.53	10.53	122.88
全国大会出場以上（n=29）	15.41	15.76	13.84	14.48	13.66	15.76	13.03	16.38	10.97	128.90

ルで分類する場合，主な大会はトーナメント方式で行われているため，ベスト16，ベスト８，ベスト４などの分類が一般的である．また，個人スポーツの分類方法として，陸上競技等，６位以内を入賞にしているもの（オリンピック）が存在する．これらのことから，包括的に高いレベルになると考えられるベスト４で区切ることで，分類することとした．競技レベルについて分散分析を行った結果，忍耐力の因子に関して，有意差が認められた（F=3.162，p<.01）．さらに下位検定の結果，「県大会出場なし」と「全国大会出場以上」間（p<.05），「県大会出場以上」と「全国大会出場以上」間（p<.01）で有意差が認められた．また，闘争心の因子に関して，有意差が認められた（F=4.310，p<.01）．さらに下位検定の結果，「県大会出場なし」と「県大会ベスト４以上」間で有意差が認められた（p<.01）．また，勝利意欲の因子に関して，有意差が認められた（F=2.545，p<.05）が，下位検定においては，有意差は認められなかった．また，集中力の因子に関して，有意差が認められた（F=2.910，p<.05）．さらに下位検定の結果，「県大会出場なし」と「全国大会出場以上」間（p<.05）で有意差が認められた．また，自信の因子に関して，有意差が認められた（F=8.124，p<.01）．さらに下位検定の結果，「県大会出場なし」と「県大会ベスト４以上」間（p<.01），「県大会出場なし」と「ブロック大会出場以上」間（p<.01），「県大会出場なし」と「全国大会出場以上」間（p<.01）で有意差が認められた．また，責任感の因子に関して，有意差が認められた（F=2.541，p<.05）が，下位検定においては，有意差が認められなかった．また，合計の因子に関して，有意差が認められた（F=6.195，p<.01）．さらに下位検定の結果，「県大会出場なし」と「県大会ベスト４以上」間（p<.01），「県大会出場なし」と「ブロック大会出場以上」間（p<.05），「県大会出場なし」と「全国大会出場以上」間（p<.01）で有意差が認められた．これら有意差が認められたどの組み合わせにおいても，競技レベルが高い方が，有意に高い得点を示した．また，自己コントロール，リラックス，協調性の因子に関しては，有意差は認められなかった．

忍耐力の因子で，いくつか有意差が認められたのは，競技レベルが上がるほど，厳しい練習

や困難を乗り越えてきたために，「強くなるためなら厳しい練習などにも耐えられる」などという気の持ち方に影響しているのではないかと考えられる．闘争心の因子で，「県大会出場なし」と「県大会ベスト４以上」で有意差が認められたのは，「県大会ベスト４以上」というレベルが，あと一歩で地区大会や全国大会に出場できるレベルなので，上のレベルまで届かなかった悔しさが影響しているのではないかと考えられる．集中力の因子で，「県大会出場なし」と「全国大会出場以上」で有意差が認められたのは想定していた通りであり，レベルが高くなるほど，試合などの大事な局面で集中力が高まると考えられる．自信の因子で，いくつか有意差が認められたのは，競技レベルが上がるほど自分の結果の伴う実力に対して，自信が持てているのではないかと考えられる．合計の因子で，いくつか有意差が認められたのは，有意差が認められた因子すべてで，競技レベルが高い方が，有意に高い得点を示した結果である．

５．父母の有無について

次頁の表５は父母の有無における各因子の平均値を示している．片親群と両親群における t 検定の結果，闘争心（$p<.05$），勝利意欲（$p<.05$），自信（$p<.01$），合計（$p<.05$）の因子に関して有意差が認められた．有意差が認められたどの因子に関しても，両親群の方が有意に高い得点を示した．また，父母の有無に関係なく，全体的に自信の得点が非常に低く，協調性の得点が高いという結果であった．忍耐力，自己コントロール，リラックス，集中力，協調性，責任感の因子に関しては，有意差は認められなかった．

闘争心や勝利意欲の因子で，有意差が認められたのは，両親群の方がスポーツを行う環境がある程度整っており，レベルの高い環境での練習や，上位レベルの大会出場経験が片親群の家庭よりも多いことが一因として考えられる．自信の因子で有意差が認められたのは，読売新聞（2008）によると，“ひとり親家庭であるということは，「どこか欠けている」「周りと違う」「おかしい」という風に幼いながらに感じている子どもが多い”とあり，片親群の家庭はスポーツに限らず，日常生活の場面で，劣等感を抱きやすくなっているため，自信がないことが考えられる．合計の因子で有意差が認められたのは，全体的に両親群の方がスポーツを行う環境面に関しても，生活面に関しても片親群に比べて恵まれた環境にいるため，良い影響が出ていることが考えられる．

６．兄弟構成について

表６は兄弟構成における各因子の平均値を示している．兄弟構成について分散分析を行った結果，闘争心の因子に関して，有意差が認められた（$F=3.493$, $p<.05$）．さらに下位検定の結果，「末子」と「１人っ子」（$p<.01$），「長子」と「１人っ子」（$p<.05$），「中間子」と「１人っ子」（$p<.05$）

表５．父母の有無における各因子の平均値

父母の有無	忍耐力	闘争心	勝利意欲	自己コントロール	リラックス	集中力	自信	協調性	責任感	合計
片親群（n=10）	12.90	12.20	11.50	12.40	11.00	13.50	8.50	15.50	9.80	107.30
両親群（n=261）	13.95	15.07	13.26	13.26	11.83	14.36	11.49	15.46	10.74	120.16

表６．兄弟構成における各因子の平均値

兄弟構成	忍耐力	闘争心	勝利意欲	自己コントロール	リラックス	集中力	自信	協調性	責任感	合計
長子（n=108）	14.02	14.95	13.58	13.87	12.00	14.77	11.83	15.30	10.63	120.96
中間子（n=47）	14.21	15.00	16.29	13.85	12.88	14.87	12.02	15.54	11.65	124.06
末子（n=100）	13.41	14.54	13.79	12.09	10.84	13.58	10.22	15.29	10.23	114.02
１人っ子（n=13）	15.23	17.92	16.15	14.46	13.31	14.62	14.08	17.46	11.62	134.85

間で有意差が認められた．いずれの組み合わせにおいても「１人っ子」の方が優位に高い得点を示した．自己コントロールの因子に関しても有意差が認められた（F=5.698, p<.01）.「末子」と「長子」（p<.01）,「末子」と「中間子」（p<.05）間で下位検定の結果有意差が認められた．いずれの組み合わせにおいても「末子」の方が有意に得点が低かった．リラックスの因子に関しては,「末子」と「中間子」の間で有意差が認められ（F=3.744, p<.05）,「中間子」の方が有意に得点が高かった．集中力の因子に関しては,「末子」と「長子」間で有意差が認められ（F=3.281, p<.05）,「長子」の方が有意に高かった．自信の因子の関しては,「末子」と「長子」,「末子」と「中間子」,「末子」と「１人っ子」間で有意差が認められた（F=8.865, p<.01）．それぞれ「長子」,「中間子」,「１人っ子」が有意に得点が高かった．責任感の因子においては,「末子」と「中間子」,「長子」と「中間子」間で有意差が認められた（F=5.722, p<.01）．どちらの組み合わせにおいても「中間子」の方が有意に得点が高かった．合計の因子に関しては,「末子」と「長子」,「末子」と「中間子」,「末子」と「１人っ子」,「長子」と「１人っ子」間で有意差が認められ（F=8.390, p<.01）, それぞれ「長子」,「中間子」,「１人っ子」,「１人っ子」が有意に高い得点であった．

闘争心の因子において,「１人っ子」が高い得点を示した理由として，兄弟がいないことで兄弟の運動能力の優劣に左右されず，競技に純粋に打ち込めることが考えられる．また，部活動に入ることで，相対的に比較する対象が現れるため，周囲に負けたくないという気持ちから闘争心が高まるのではないかと考えられる．リラックスの因子において,「末子」の得点が低いのはこれまでの生活の中で自身の上に兄や姉がいるためサポートを受けやすく，ゲームにおいてそれらのサポートが受けられない１人のプレイヤーとして主体的に行動する際に不安を感じやすいことが要因として考えられる．集中力の因子において,「長子」が「末子」よりも高い得点を示したのは,「長子」は「末子」に比べ生活面において兄弟間で先行体験のない場面に直面することが多く，その際に集中力を求められることが要因として考えられる．自信の因子において,「末子」が他の「長子」,「中間子」,「１人っ子」よりも得点が低いのは，自身の上にいる兄や姉のあらゆる面においての行動をみており自身の行動と比較し，彼ら彼女らが出来ていることが自身には出来ていなかったりすることにより，自身の出来る行動の範囲を比較し過剰に意識してしまうためであると推察される．その点,「中間子」は兄や姉を持っているが,自身も兄や姉という立場にある為に弟や妹の行動と自信の行動を比較し彼ら彼女らが出来ていないことを出来ることにより自信を深めることができることが要因の１つと推察される．自己コントロールにおいて「長子」や「中間子」が「末子」よりも高い得点を示したのは,「長子」

や「中間子」の方が自身の下に兄弟を持つために兄や姉として自覚を伴った行動をしなければいけないという意識から冷静さや自己管理スキルが高いためであると推察される．

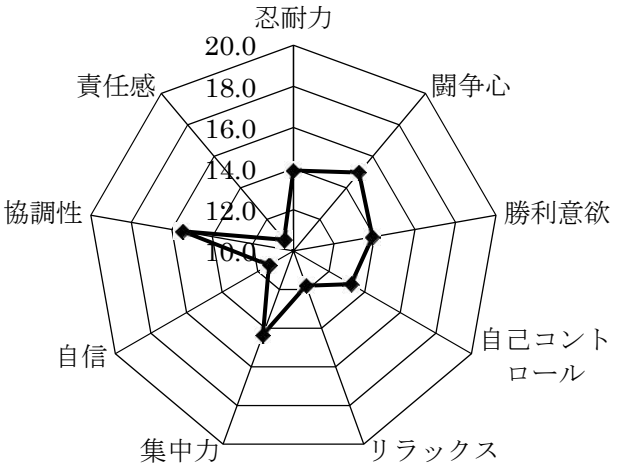

図1．各因子の平均値

7．全体について

図１は全体における各因子の平均値をレーダーチャートに示したものである．各因子の平均値を見ると協調性が最も高く，最も低いのが責任感となった．松野（1998）は“本音を言うと，あとあとシコリが残る恐れがあり，日本社会では，積極的に自己主張するよりも,「言わぬが花」,あるいは少し控えめに行動した方が万事スムーズにいく”と指摘しており，平川（2014）が“日本人の謙虚であることをよしとし，謙遜が美徳とされる文化”と称する日本社会の文化が，高い協調性や低い責任感に影響しているのではないかと推測される．

8．問題点について

今回の調査の問題点として，各競技種目別の人数に差があることが問題として挙げられる．「チームスポーツ」「個人スポーツ」「対人スポーツ」の３つに分類したが，中でも「チームスポーツ」の人数が圧倒的に多く，「個人スポーツ」や「対人スポーツ」は，多くの人数のデータを集めることができなかった．また，片親群の調査対象者が少ないことも問題として挙げられる．さらに，調査対象者の回答に関して，２つの問題点が挙げられた．１つは回答に空欄が見受けられたことである．フェイスシート，解答欄ともに空欄が見受けられる回答があった．もう１つは，不適切に答えたであろう回答があったことである．明らかに意図的に連続させた回答や極端に短い回答時間で回答した調査対象者が見受けられた．

9．今後の展望

まず，各競技種目別の調査対象者数に差があるという問題点を改善するために，S大学の部活動だけではこの分類の仕方であると，調査対象者数に差が出てしまうので，他大学の協力を得るなどしてより多くのデータを集められるようにする必要がある．次の，片親群の調査対象者が少ないという問題も，同じように調査対象者数を他大学の協力を得て増やしていくことが解決策の一つとして考えられる．回答に空欄が見られた問題は，今回の調査においては自由速度法で実施していたが，強制速度法を用いることなどによって回答率を高める必要があろう．また，不適切に答えた回答が見受けられた問題では，その部活動に直接関係していない人が調査を行うことで緊張感を持たせたり，回答に虚偽尺度を用いるなどの工夫が今後必要となろう．

まとめ

本研究では，大学運動部に所属する271名のアスリートを対象に，心理的特性の差異を明らかにすることを目的としてアンケート調査を行った．その結果，性別，競技種目，競技年数，競技レベル，父母の有無，兄弟構成全てにおいていくつかの因子で差が見られた．概して，競技年数が長く，競技レベルが高く，両親群の方が，因子得点が高い結果となり，予想通りの結果になったと言える．性別に関しても，男性の方が闘争心・責任感が高く，女性の方が協調性が高い結果となったのは予想通りであったと言えよう．競技種目別にみると，比較的対人スポーツの得点が低い結果となったが，個人で競技を行うにもかかわらず，相手がいることにより自分自身でコントロールできなかったり，試合中に仲間の援助が受けられなかったりすることが理由として考えられるが，明確な分析は今後さらなる研究を期待したい．兄弟構成については，１人っ子の得点が比較的高い結果となったが，親からの援助を一身に受けるという意味では恵まれた環境におり，そのことが得点が高い結果の一因として考えられるが，明確な理由はわからず，さらなる検討が必要であろう．

謝辞

本調査のデータ収集・分析に携わったゼミ生の石黒麻歩，中村武彦，西井良，三井遼，吉山浩平各氏に厚く御礼申し上げます。

文献

福井邦宗・土屋祐睦・豊田則成（2014）大学生アスリートにおける不安と実力発揮の関係：特性不安と心理的競技能力に着目して，びわこ成蹊スポーツ大学自由研究論文，第11号，p.75

長谷川晃（2012）私の独り言「男脳と女脳」www.osaka-u.info/pdf/2012/10/article05_1.pdf

平川裕貴（2014）「グローバル社会に生きる子どものための－6歳までに身に付けさせたい－しつけと習慣」，アマゾン出版

本間美和子（2009）シンクロナイズドスイミング日本代表選手の心理的競技能力，Japanese Journal of Sciences in Swimming and Water Exercise Vol.12，No1

松田岩男・杉原隆（1987）新版運動心理学入門，大修館書店

松野町夫（2013）リベラル21 日本人とは何か（１）lib21.blog96.fc2.com/blog-entry-2512.html

内閣府男女共同参画局推進課（2010）内閣府「共同参画」2012年10月号，p.5

岡本昌也・高津浩彰・寺田泰人（2008）個人種目選手とチーム種目選手の心理的競技能力，愛知工業大学研究報告，第42号 A，vol42-B

シンガー（1981）藤田厚訳　コーチに役立つスポーツ心理学，不味堂出版，p.137

田中美季（1994）高等学校の運動部活動の現状と課題　－生徒のからだとこころの側面から－，高松短期大学紀要　第25号 pp25－34

安田昭子（1984）日本スポーツ心理学会編　スポーツ心理学Q&A，不味堂出版

読売新聞（2008）読売新聞2008年7月29日『親離婚の子ども 相談できる場を』